

「合理性のレンズ」からの自由 ——「ゴミ屋敷」を巡る「悪循環」からの脱出に向けて——

竹端 寛

I. 「ゴミ屋敷」を巡る二つのモデル

ゴミが散乱して部屋いっぱい埋まっている。時には家の中だけでなく、敷地内にびっしり拾ってきた「まだ使えるもの」で埋め尽くされている。臭いやゴキブリなど、近隣とのトラブルも起きている。だが、ご本人にとっては、「大切なもの」であり、周りから「ゴミ」とラベルを貼られること自体にも憤慨していて、話し合いができない。他人を寄せ付けない…。

最近、福祉業界でしばしば耳にする、いわゆる「ゴミ屋敷」¹。あなたがその方に関わるケアマネージャー・相談支援専門員・福祉事務所のワーカー…のような支援者だった場合、どう対応するだろうか？ このような方と関わる際に、あなたが「客観（常識）」と「ご本人の物語」のどちらの世界観を重視するか、で展開が大きく異なってくる。

前者の「客観（常識）」の世界観で「ゴミ屋敷」と関わるとき、まず目標とされるのは、「ゴミをキレイにする」ということである。これは、唯一不動の「正解」である。この背後には、「ゴミを溜める人はだらしがない」「ご近

¹ 「ゴミ屋敷」については、春日（2001）、関（2005）、岸（2012）など、医療者側からの分析、あるいは「ホーダー（hoarder）」というラベルを貼った臨床心理学者による論考（フロスト&ステイクティ― 2011 = 2012）など、様々にある。その中でも、関（2005）の論考は、医者―患者という上下関係ではなく、「その家の物語世界にお邪魔させていただく」というスタンスでのルポであり、当事者の内在的論理や、信頼関係に基づく変容可能性などを伝えてくれ、豊中市社会福祉協議会で「ゴミ屋敷リセットプログラム」を展開するコミュニティ・ソーシャルワーカー（CSW）の勝部（2009）のアプローチと通底している。筆者のこの問題の理解は、関（2005）や勝部（2009）から学ぶところが大きい。

所に迷惑をかけるのがいけない」という価値前提があり、この価値前提に基づき、相手の態度を変容させることが目標とされる。よって、ご本人に働きかけ、時には民生委員や「ご近所力」の力を借りながらも、「ゴミを捨てればそれで良い」というゴールが設定され、そのゴールに向けた取り組みが行われる。そして、近隣住民総出でゴミを片付けた、にもかかわらず、数か月後、再び主がゴミをためてしまった場合、「常識」的に設定された「正解」に従うことができない「ゴミ屋敷の主」は、「オカシイ」人とされ、「性格の著しい偏り」「人格障害」「発達障害」「精神病」などのラベルが張られ、医療や福祉の専門家が対処すべき「困った人」とされる。その中で、「あの人に言ったってわからない」と、やがて地域社会から排除され、ますます孤立感が深まり、そのためどんどん溜めるゴミの量も増えていく…。

一方、「ご本人の物語」の世界、つまりご本人の内側に存在する論理である「内在的論理」に寄り添おうとするなら、この同じ方への関わりは、かなり変わってくる。まず、「ゴミをキレイにする」という「正解」を相手に押しつける前に、その人はなぜ「ゴミを溜める」のか、という具体・個別の物語の理解からスタートする。誤解がないように言うと、元々ゴミ愛好家、なる人はいない。「ゴミ屋敷」の場合はたいてい、それまで普通に暮らしてきた人々である。それが、失業や家族との別離、様々な社会的ストレス…などが「きっかけ」になり、「ゴミを溜める」理由が社会的に構成されてきた歴史がある。

支援する側に求められるのは、まずその「ゴミを溜める」に至った「ご本人の物語」や「内在的論理」を理解し、共感しようとする姿勢だ。その中で、「本当は溜めたくなかったのだけれど」「もう、今更どうしようもない」という絶望感や諦めが出てくるかもしれない。だが、それらの表現は、ご本人の変容可能性と、問題の流動化可能性を指し示している。そこで支援者が、「ゴミを捨てれば良い」という「正解」概念を振りかざさず、「本人とのかかわり合い」という偶然の出会いを続け、「ご本人の物語」の変容可能性に賭ける中で、少しずつ「ご本人とゴミの物語」の位置づけが変わり始める。すると周囲から「気難しい」「頭がオカシイ」とラベルを貼られていたご本人にも、「実は…」と、これまで言えない胸の内が語られ始める。その中で、この支援者が助けてくれるなら、と、ゴミと一緒に片付けることに挑戦し始めるかもしれない。だが、支援者は、「ゴミを捨てる」という「唯一

の正解」を模索するのではなく、この人にとって「ゴミを捨てる」ことにどのような意味があるのか、その上でどんな人生と一緒に模索できるのか、というご本人の内在的論理や物語の変容支援に携わる。病気や障害のラベルを貼って「わかったふり」をせず、本人からみた「問題」に関する語りを読み解き、周囲と本人が共同で新しい自己物語を構成していく実践を展開する。

なぜ、このように二つのストーリーは異なるのだろうか？

それは、私達が「社会的な支援が必要としている人」に対してどのような「まなざし」と「価値観」で接しているか、の違いであるとも言える。では、それはどういう違いなのだろうか？ そのことを考える上で、合理・不合理という「違い」を補助線に入れてみよう。

Ⅱ. 合理と非合理

私たちが、自然はそれ自体整然たる合理性の法則にしたがって動いていると考えているのは、たいへんな錯覚である。自然そのものが合理性を有しているのではない。私たちが自然を、合理性というレンズを通して見ているだけのことなのである。合理性とは、反省的な対象意識の眼から見られた自然のあるべき姿であり、人間の生死に関する目的論的な関連においてとらえられた自然の好ましい動きである。(木村 1975, 363 頁)

精神科医の木村敏の指摘で重要なのは、「私たちが自然を、合理性というレンズを通して見ている」という点である。もともと自然が「合理的」であるはずはない。地震も噴火も、どれくらいの規模のものがどのように起こるのか、現時点では予測不可能である。ただ、「人間の生死」に関わる重大な問題なので、科学という「反省的な意識対象の眼」を用いて、予知や予測の精度を上げてきた。「天気予報」というのは、その「合理性というレンズ」を通じてみた、自然の変化予想図である。だが、この予報ですら、時として外れる。それでも人類は、「合理性というレンズ」の精度を上げようと必死になる。それはなぜなのか。

たとえば、火はそれが人間の統制下にあるかぎり人間の生存にとってき

わめて有用であるが、ひとたび人間の統制を逃れるとたちまち致命的な危険を意味するようになる。したがって、火に合理性を帯びさせること、いいかえれば火を合理的に管理することは、文明がみずからに課した最大の課題であった。(木村 1975, 363 頁)

「合理性の法則」を重要視する最大の理由とは、自然が「ひとたび人間の統制を逃れるとたちまち致命的な危険を意味する」からである。つまり、「人間の統制下」で、人間が支配し自然が服従する、という「支配—服従」関係におかないと、人間自身が自然に支配される(致命的な危険に脅かされる)からである。つまり、「火に合理性を帯びさせる」とは、「火」を人間の支配下に置くことによって、「火を合理的に管理すること」を意味する。そして、この「合理性」支配は、次のような帰結を生むことになる。

非合理が非合理として成立しうするためには、非合理はけっしてそれ自体独立の存在であってはならないのであって、非合理は合理の否定としてのみ、つまり合理の成立に完全に従属した存在としてのみ、その成立を許されるのである。逆にこれを合理の側から見るならば、合理が合理としての存在を確保しようとするためには、それはどうしてもいっさいの非合理から独立性を奪って、これをみずからの従属的対概念にまで弱体化しなくてはならないということになる。だから「合理—非合理」という対概念の中に「捕獲」された「非合理」は、真に合理性を脅かす力を奪われて、合理性に飼い慣らされた仮の非合理であり、いわば合理化された非合理である。(木村 1973, 147-148 頁)

木村は、「非合理」を「合理の成立に完全に従属した存在」である、とみなす。「非合理」が「それ自体独立の存在」であれば、「致命的な危険」をもたらしかねない。「合理性というレンズ」は、「非合理」を、「合理—非合理」という対概念の中に捕獲」することによって、「真に合理性を脅かす力を奪」う。「合理化された非合理」とは、本来支配や統制が不可能な自然を、支配や統制、管理が可能なるものである、と「錯覚」することによって、成立する概念である。

なぜ精神科医がこのような分析をするのか。それは、私達が「異常」「非

合理」と他者にラベルを貼るとき、この「合理化された非合理」という概念を人間にも当てはめていることを指摘するためであった。そうであるならば、「ゴミ屋敷」に対しても、同じような「合理性というレンズ」を通じて「合理性に飼い慣らされた仮の非合理」として捉えていないだろうか。

先にもみたように、「ゴミ屋敷」の主は、「オカシイ」人とされ、「性格の著しい偏り」「人格障害」「発達障害」「精神病」などのラベルが張られ、医療や福祉の専門家が対処すべき「困った人」とされる。だが、そのようなラベル貼りをしている側は、自分自身を「オカシクナイ」「困っていない人」である、と定義している。これは、「合理性の法則」が、「非合理」を「合理—非合理」という対概念の中に「捕獲」している姿そのものである。つまり、「ゴミ屋敷」をオカシイとラベルを貼ることによって、ゴミを溜めない家はオカシクナイ、という「合理性」を強化するために活用している。よって、そのような「合理性」(=客観、常識)の価値前提に基づき「ゴミ屋敷」のゴミ掃除を手伝おうとしても、そもそも「飼い慣らされ」ようとされている側が、そう簡単にその「捕獲」に引っかかるはずはない。これが、「ゴミ屋敷」問題の解決の難しさの理由でもある。

では、このとき、どういうアプローチの変換が求められるのだろうか？

Ⅲ. 苦痛の伴侶

彼らが社会の常識的・合理的な日常性のルールに同調しえず、社会から隔離されざるを得なくなった真の原因を深く探してみると、そこには隠された大きな「困窮」と「苦痛」が働いているのが見出される。彼らは自ら好んで狂気をえらんだのではなく、彼らのいわゆる「狂気」とは、彼らの人間的なあり方と一般の日常的な社会との摩擦の産物にすぎないのである。(木村 1975, 339 頁)

この文章の「狂気」を「ゴミを溜める」と言い換えたら、「ゴミ屋敷」の問題の根源的な表現でもある、と言える。「ゴミ屋敷」に関して、その問題に詳しくない人ならば「自ら好んで溜める」と思っている人は多いが、実際にゴミを溜めるに至る背景には、「隠された大きな『困窮』と『苦痛』が働いている」場合がほとんどなのだ。この際、「彼らの人間的なあり方と一

般の日常的な社会との摩擦の産物」である「ゴミを溜める」という表面的要素に眼を奪われるのか、その背後にある「困窮」と「苦痛」に想像力の翼を伸ばせるか、で関わり方が大きく変わってくる。

彼らは例外なく痛ましい歴史を歩んだ人達である。だから、精神科医が彼らの「苦痛の伴侶」として彼らの痛ましい歴史を共に歩むことができるためには、精神科医は日常的常識の代弁者としての機能を捨て、日常世界の安全地帯に身を置いた「正常者」としてではなく、自己自身の中にも同じ狂気の可能性を含んだ弱い人間として、さらに言うならば、この矛盾と欺瞞に満ちた日常社会の中で狂気を選ぶだけの純粹さを保ち得なかった負い目のある者として、患者の苦痛と出会わなくてはならない。(木村 1975, 339-340 頁)

「社会的弱者」とされる人に支援する「支援者」は、二つの立ち位置を取り得る。一つは、「正常者(多数者)」が「日常的常識の代弁者として」「異常者(少数者)」に対して「何かをしてあげる」という立ち位置である。もう一つは「自分自身の中にも同じ狂気の可能性を含んだ弱い人間として」、つまりは「自分もそうなりうる可能性がある」と自覚した上で、「痛ましい歴史を歩んだ人達」への「苦痛の伴侶になる」という立ち位置である²。

このうち前者は、「非合理」を、「合理—非合理という対概念の中に捕獲」しようとする立ち位置でもある。管理や支配、統制の発想である。この発想に、管理・統制される側は、反旗を翻してきた。例えば24時間、介護や支援がなければ生きていくことができない重度障害者でも、専門家支配に対して強烈な拒否反応を示した人々がいる。介助を受けることへの拒否反応ではない。専門家が「日常世界の安全地帯に身を置いた『正常者』として」障害者に接するとき、管理や支配、統制などの上下関係が持ち込まれること

² 木村が「苦痛の伴侶」と述べた同時代に、イタリアの精神病院解体に取り組んだ医師フランコ・バザーリアは「病気ではなく、苦悩が存在するのです。その苦悩に新たな解決を見出すことが重要なのです。(略)彼と私が、彼の<病気>ではなく、彼の苦悩の問題に共同してかかわるとき、彼と私との関係、彼と他者との関係も変化してきます」と語っていた。国の違いを超えて現象学的視点から患者に寄り添う支援者に共通する論理である。詳しくはシュミット(2005)、大熊(2009)、竹端(2013)参照。

に、多くの障害者がNO!を突きつけたのである³。

一方後者では、「非合理」を「彼らの人間的なあり方と一般の日常的な社会との摩擦の産物」と見なす。その際、「彼らの『苦痛の伴侶』として彼らの痛ましい歴史を共に歩むこと」ができるかどうか、が問われている。「社会の常識的・合理的な日常性のルールに同調」できないことを糾弾や矯正しようとしな。病気や障害、生活困窮などの「困窮」と「苦痛」に寄り添い、「苦痛の伴侶」として、対象者とともに歩むことができるか、が問われている。

そして、支援者が対象者とともに歩む「苦痛の伴侶」ならば、両者の間でなされる対話が決定的に重要になる。「ゴミを捨てればそれで良い」という「合理性というレンズ」の指示・命令に相手が従うかどうかという関係は、対話的關係ではなく、支配—服従の關係である。だが、この支配—服従の關係では解決しないから、「ゴミ屋敷」を巡る悪循環構造が増幅し、事態は膠着化する。支援者と「ゴミ屋敷の主」の間で、支配—服従關係ではなく、対話的關係が構築できるかどうか。これが「ゴミ屋敷」を巡る「悪循環構造」から脱出ができるかどうか、の分かれ目であると筆者は考える。そして、このことを掘り下げるためには、改めて支配—服従關係と対話的關係とは何か、を問い直す必要がある。

IV. 支配—服従關係を超えて

無知を疎外する教師は揺らぐことなき地位を維持しつづける。教師はいつも知っていて、生徒は常に何も知らない。知る者と知らない者の地位の固定は、教育とは探求するプロセスそのものである、という姿勢を否定する。(フレイレ 2011, 81 頁)

パウロ・フレイレは、ブラジルで大地主から搾取されていた小作人達に識字教育を行っていた教育学者である。だが、彼が農民達と話し合ううちに、

³ この専門家支配について、病院医療における医療者の患者支配との類似性から「障害の医学モデル」と名付け、それに対して障害があるままでの自立や自己決定を尊重してほしい、という異議申し立てがやがて「障害の社会モデル」と区別されるようになった。詳しくは久野・中西(2004)、杉野(2007)などを参照。

単に字を教えるのではなく、小作人達が地主達に「飼い慣らされた」現状を変えるためには、被支配者と支配者の関係性を変えることこそ大切である、と気づき、それを『被抑圧者の教育学』というタイトルで、1968年に出版した。この本は、時代を超え、抑圧—被抑圧の関係性を考える古典として、今なお世界中で読み継がれている。

フレイレが語る、教師と生徒の抑圧—被抑圧の関係性。これは、これまで検討してきた「ゴミ屋敷」を巡る支援者と「ゴミ屋敷の主」の関係性にも類似していないだろうか。絶対的な知識量を誇る教師と、それを「知らない」生徒。そこには、「知る者と知らない者の地位の固定」、抑圧—被抑圧、支配—服従関係の固定が生じる。「ゴミ屋敷」に関わる支援者が、この内面化された権力関係を相手に意識的／無意識的に突きつけた場合、「ゴミ屋敷の主」は、相手を支援者ではなく、「合理性というレンズ」で自らを査定しようとする抑圧者、支配者として捉えるのではないだろうか？そして、あなたがその「ゴミ屋敷の主」なら、そのような抑圧者、支配者に易々と支配されるだろうか？必死に抵抗しないだろうか？つまり、「ゴミ屋敷の主」が、民生委員や保健師の訪問や説得に応じない、暴言を吐く、などの「困難事例」も、本人にとっては、抑圧者や支配者（に見える相手）を前にした、必死の抵抗である、とは言えないだろうか？

「地位の固定」により、「教育」における共に「探求するプロセス」が失われる、とフレイレは指摘する。これは、福祉に置き換えても、全く同じである。大切なのは、「地位の固定」化に反旗を翻した上で、「合理性というレンズ」に基づいて査定することではなく、「ゴミ屋敷」という「彼らの人間的なあり方と一般の日常的な社会との摩擦の産物」や、その悪循環の内在的論理を「探求するプロセス」に、「ゴミ屋敷の主」と支援者（＝「苦痛の伴侶」）が共に取り組むことである。その中で、固着していた悪循環構造が開く可能性がある。その際、先述の「対話」の重視という部分について、フレイレも次のように述べている。

対話とは世界を媒介にする人間同士の出会いであり、世界を“引き受ける”ためのものである。あなたと私という関係だけで空虚になってしまうようなものではないのである。これが世界を引き受けようとする人とそれを望まない人との対話が成り立たない原因である。言葉を話す権利

を否定しようとする人と、その権利を否定されてしまった人との対話はこのようにして成り立たなくなる。言葉を話すという本来の権利を否定されてしまった人がこれらの権利を得ることがまず必要だし、このような非人間的な攻撃を止める必要もある。言葉を発して世界を「引き受け」、世界を変革するのであるならば、対話は人間が人間として意味を持つための道そのものであるといえるだろう。(フレイレ 2011, 120-121 頁)

「ゴミ屋敷の主」である「あなた」がゴミを溜める悪循環から抜け出せなくなった背後には、「隠された大きな『困窮』と『苦痛』が働いている」。その「隠された大きな『困窮』と『苦痛』」の歴史やプロセスを、「私」はまずじっくりと伺うことができるか。「ゴミ屋敷の主」である「あなた」と支援者の「私」に対話が成立するか否か、はこの点にかかっている。

フレイレは、非抑圧者を「言葉を話す権利を否定されている人」と捉えているが、これは本稿における「ゴミ屋敷の主」にも置き換え可能である。「ゴミを捨てればそれで良い」という周囲の姿勢は、「ゴミ屋敷の主」がゴミを溜めざるを得なかった背後にある「隠された大きな『困窮』と『苦痛』」の歴史やプロセスには着目しない、ということの意味する。これは、「ゴミ屋敷の主」が「ゴミを溜める真の理由」を「言葉」にして「話す権利を否定」することであり、「その権利を否定されてしまった人」には、「世界を”引き受ける””ことができなくなってしまっているからである。

だからこそ、「ゴミ屋敷の主」である「あなた」に関わろうとする「私」が、まず相手の「隠された大きな『困窮』と『苦痛』」という本音をじっくり伺う必要がある。その対話を通じて、相手が「言葉を発して世界を『引き受け』」るプロセスを回復する支援こそが、必要不可欠である。そのプロセスを通じて、「あなた」と「私」の間に対話に基づく信頼関係が生じ、そこから「ゴミ屋敷の主」にも、「人間が人間として意味を持つための道」が開かれていく。その中で、「ゴミ屋敷」に関する「私」の見方にも、大きな変容が生じる。

状況は認識行為の現れであり、すでにある魔術的あるいは従順な見方を克服する手がかりとして提示される。実際のところ、従順で魔術的な現

状のとらえ方とその結果として現れる宿命論的な考え方は、もう一つの見方にとって替わる。それはすなわち自分の見える行為自体を知覚の対象に捉えるような知覚である。(フレイレ 2011, 112 頁)

ひとたび「あなた」と「私」が「隠された大きな『困窮』と『苦痛』」を共有し始めると、「ゴミを溜めるのが悪い」「ゴミを捨てればそれで良い」という「客観（常識）」の視点が、一種の「魔術的あるいは従順な見方」であることが見えてくる。つまり、「ゴミを溜める人は〇〇だ」という「宿命論的な考え方」は、「従順で魔術的な現状のとらえ方」であり、支援者である「私」の偏見や先入観に過ぎない事が明確になる。ということは、「私」が「ゴミ屋敷」に関する「認識行為」を変え、「隠された大きな『困窮』と『苦痛』」を共有すれば、「ゴミ屋敷」という「状況」は変容されうる、という事である。この「魔術的な現状のとらえ方」を乗り越える、「自分の見える行為自体を知覚の対象に捉えるような知覚」を「私」が獲得できるかどうか、が決定的に重要になる⁴。

そして、そのような「知覚」に基づいた支援をしている支援者も、現実に存在している。

V. 「問題」の捉え直し

そもそも「問題」の存在というのは、「何か不調和なことが生じている」ことの象徴だと思うのですね。とすると、それはクライアントにとって、「何か成長すべき事があるというお知らせ」であるともいえるわけです。(東 2013, 232 頁)

家族療法のセラピストである東豊は、来談者が主訴として訴える「問題」を、「何か成長すべき事があるというお知らせ」と認識する。不登校や摂食

⁴ この認識枠組みの転換に関しては、「東洋文化」92号に掲載された拙稿「枠組み外しの旅—宿命論的呪縛から真の〈明晰〉に向かって—」で最初に取り上げ、その後『枠組み外しの旅—「個性化」が変える福祉社会』（竹端 2012）という一冊の単著にまとめることができた。本稿は、その論考に基づきながら、「合理・非合理」問題という新たなテーマを掘り下げる続編として位置づけている。

障害、夫婦の不和などのような「不調和」に、「それが問題だ」というラベルを貼ってわかった気になろうとしない。そこに「成長すべき事があるというお知らせ」=可能性を見出す。これはいったいどういうことか？

「ものごとは相互作用している全体（システム）である」という観点に立てば、個人のもっているフレームが変化することで、連鎖的に感情や行動にも変化が生じ、それがその人の身体や周囲の人間関係により影響を及ぼすことが期待できる。（東 2013, 17 頁）

「客観（常識）」モードでの「問題」というラベルの張り方は、それがゴミ屋敷や不登校などの「問題」の場合、しばしば、否定的な価値観と強く結びついている。そして、家族や支援者、周囲の人々が「それが問題だ」と否定的なラベルを貼ることが、本人にとっての「不調和」=「問題」を、より悪い循環へと強化させている可能性がある。つまり、本人と家族や支援者、周囲の人々の「相互作用」のなかで、「問題」という「不調和」が生じているのである。

であればこそ、本人を変えようとする前に、本人に関わる支援者や家族、周囲の人々の「フレームが変化すること」で、相互作用は大きく変容する可能性もある。つまり、その「問題」を「成長すべき事があるというお知らせ」=可能性と捉え、「相互作用している全体（システム）」⁵を揺り動かそうとするならば、「問題」=「不調和」の構造も変わりうる、と臨床経験に基づき指摘しているのである。これはゴミ屋敷や不登校などの「問題」を、しばしば否定的に捉えられる因果モデルの直線的思考法から切り離すことであり、悪循環構造から脱出する為のアプローチでもある。

要は一つひとつの内容（コンテンツ）ではなく、相互作用が変わることが大切だということである。「誰の問題なのか」「どちらが悪いのか」といったことについては、真実を語ることは決してできないし、それをはっきりさせることも、（法律にかかわるような場面は別にして）とく

⁵ 東は家族システム全体に働きかけて「問題構造」を揺り動かし、解決に導くシステムズアプローチを用いている。その全体像については、吉川・東（2001）も参照。

に重要ではない。どのように述べようが、それは相互作用の切り取り方次第であり、片面の真実に過ぎないのである。(略)しかし一方、そのような悪循環を変えることは、あなたがその気になりさえすれば、実は簡単なことである。「自分が原因である」と考え、自分から変わればいいのである。(東 2013, 216 頁)

ゴミを溜めるという「コンテンツ」ではなく、「ゴミ屋敷の主」と周囲の人(親戚・近隣住民・支援者)の「相互作用が変わることが大切」と、東は指摘する。その上で、「誰の問題なのか」と糾弾するモードではなく、『自分が原因である』と考え、自分から変わればいい」とも言い切る。ただ、この際、「問題とされている人」は、「自分から変わる」きっかけやタイミングを見失い、悪循環に陥っている、と見立てるならば、本人に変容を求めるよりも、本人に関わる支援者自身の「原因」と受け止め、支援者の変容課題と認識すれば、悪循環構造は転換するともいう。

これまでの議論に重ねるならば、支援者という専門家が持つ「合理性のレンズ」は、あくまでも「ものの見方の一つ」である。その専門性で、より問題がクリアになり、対象者本人が望む解決策を見つけ出すことができるならば、役に立つ「レンズ」である。だが、その「合理性のレンズ」そのものにも、当然のことながら偏差や歪みがある。そして、そのレンズの歪みに、当の専門家が無自覚なまま、「合理性に飼い慣らされた仮の非合理」として対象者の「問題」に向き合う時に、支援者と対象者は、抑圧—被抑圧の関係性へと陥りやすい。そして、そのような「従順で魔術的な現状のとらえ方とその結果として現れる宿命論的な考え方」に、支援者も対象者も囚われているからこそ、「悪循環」構造は変わらない。

ゴミ屋敷や認知症、発達障害…等の様々な「原因」で、家族や近隣住民と対立構造に追い込まれる人がいる。その際、これまで、その「原因」に症状というラベルを貼り、本人が「問題だ」と同定する、直線的な因果モデルで考えられることが多かった。だが、そのように「誰の問題なのか」「どちらが悪いのか」と「原因」を追求することが、結果的に「いっさいの非合理から独立性を奪って、これをみずからの従属的対概念にまで弱体化」しようとするが故に、返って悪循環が増幅する場合も少なくなかった。

そこで、本稿で提示した悪循環からの脱出方法とは、「相互作用」論であ

る。つまり、「問題だ」「非合理だ」とラベルを貼る、「合理性のレンズ」を備えた「客観」「常識」世界と「非合理」「問題」世界の相互作用で、「問題」は大きくなっている。であれば、「問題だ」「非合理だ」と相手を糾弾するのではなく、その「合理の成立に完全に従属した存在としてのみ、その成立を許される」「非合理」世界が「合理」世界とのどのような「相互作用」で成り立っているのか、を「対話」の中から見極め、その「悪循環構造」を変えるために、「合理」世界の側にいる自分からどう変わればいいのか、を模索することが、「苦痛の伴侶」には問われる。

「合理性のレンズ」をはめたら、「非合理」な相手のせいにはできる。でも、そのレンズを外せば、「問題の一部は自分自身」である。しかし、その「問題」は、「合理性のレンズ」が反復・強化するなかで生成・拡大されるものであるとするならば、まずは「問題」そのものを捉え直すことから始めなければならない。そうすれば、「問題」に内包されている、「何か成長すべき事があるというお知らせ」に、支援対象者だけでなく、支援者も含めた関係者双方が気付くことができるのかもしれない。

VI. 合理の「まなざし」「価値観」の捉え直し

本稿を閉じるにあたって、「ゴミ屋敷」をはじめ、「社会的な支援が必要としている人」に対して私達がどのような「まなざし」と「価値観」で接しているか、の問題を、もう一度取り上げたい。それは、「ゴミ屋敷」をオカシイとラベルを貼ることによって、ゴミを溜めない私たちはオカシクナイ、と自らの「合理性」を強化する「まなざし」や「価値観」について、である。

筆者は、「ゴミ屋敷」を排除する「まなざし」や「価値観」には、「合理性というレンズ」の強化、のみならず、その「レンズ」の精度に揺らぎを与えかねないような「非合理」をそのものとして理解したくない、という「欲望」が働いているのではないか、という仮説を抱いている。「合理と非合理」の節で引用した木村敏は「合理が合理としての存在を確保しようとするためには、それはどうしてもいっさいの非合理から独立性を奪って、これをみずからの従属的対概念にまで弱体化しなくてはならない」と指摘している。「ゴミ屋敷の主」をオカシイ人という「合理性」の「まなざし」で解釈せず、相手の内在的論理を聞いてしまうことは、「非合理」の「独立性」を担保する

ことである。「非合理」にはそれなりの「理由」があることを認めることである。それをすることが、「非合理」の「独立性」を肯定すること、ひいては「合理が合理としての存在を確保」することの否定につながる、という危機感に基づいているのではないか、という仮説である。

「あいつはオカシイ」と区別することで、「私はオカシクナイ」という存在根拠が担保される。逆に言えば、「あいつのオカシさも理解可能だ」となると、「私もオカシイ状態になる可能性がある」と推論が働く。すると、その推論の肯定は、自らの「私はオカシクナイ」という「合理性」の不変性や土台を揺るがしかねない。非合理を「従属対概念」にすることで担保された合理の存在根拠や「独立性」が、決定的に揺らいでしまいかねないのだ。すると、私の「まなざし」や「価値観」が揺らぐ。それは、私自身の土台が揺らぐことでもある。「こんなに頑張って（無理して、シンドイ思いをして…）合理の世界に踏みとどまっているのに、いまさら非合理を認めることなんてできない！」という苛立ちや焦燥、自己嫌悪、自己否定の渦…などにのみ込まれるかもしれない。そのような不安定性に耐えられないからこそ、オカシイ／オカシクナイ、異常／正常、あなた／私はきっちりと峻別できる二項対立的要素に分けておく必要があるのである。「オカシクナイ」私自身のアイデンティティ保持と「合理性のレンズ」の秩序維持のためにも。

木村敏は「苦痛の伴侶」の役割を担う精神科医を、「自己自身の中にも同じ狂気の可能性を含んだ弱い人間として、さらに言うならば、この矛盾と欺瞞に満ちた日常社会の中で狂気を選ぶだけの純粹さを保ち得なかった負い目のある者として」位置づけようとする。その「まなざし」や「価値観」には、二項対立的な峻別はなく、「自己自身の中にも同じ狂気の可能性を含んだ弱い人間」という「共有可能性」が含まれている。合理が非合理を従属させるのではなく、むしろ「狂気を選ぶだけの純粹さを保ち得なかった負い目」という形で、非合理の独立性を認め、合理を「従属的対概念」にまでしようとしている。

この合理と非合理の立ち位置の逆転こそ、「私はオカシクナイ」という合理世界の絶対化を求める「まなざし」や「価値観」にとって、自らの存在根拠への重大な脅威に映るのではないか。ゴミ屋敷やホームレスの強制排除を求める声が各地で広まっている背後には、そのような「合理性の帝国」が揺らぐことへの根源的不安があるように思える。だが、そもそも木村の指摘す

るように、「自然そのものが合理性を有しているのではない」。自然の一部である私達の中にも、「非合理」の要素が内在しているのである。その内なる要素が外在化された存在としての「ゴミ屋敷の主」との対話は、自分が見たくない・否定したい存在との対話、かもしれない。しかし、そのような真の他者との対話の中からこそ、自らの寄って立つ根拠である「合理性の帝国」が持つ歪みや矛盾、息苦しさや生きづらさを打ち破るヒントが生まれて来るのではないかと、筆者は考えている。

「合理性のレンズ」の歪みや偏りは、そのレンズを外してみないと、わからない。そして、そのレンズから自由になるためにも、非合理とされる世界を単に「オカシイ」と排除して「合理性のレンズ」を強化するのではなく、そのレンズを外して、非合理＝オカシイとされる世界の内在的論理にじっくりと耳を傾けてみる必要がある。そこに、「この矛盾と欺瞞に満ちた日常社会」の構造を把握し、その矛盾や欺瞞を少しでも解消するためのヒントも眠っているのかもしれない。

追記：本稿の元原稿では、「ゴミ屋敷の主」の内在的論理を解明する視点として、「ナラティブ・アプローチ」という分析枠組みを取り入れていた。だが、草稿をお読み頂いた東京大学の安富歩先生から、論理実証主義とナラティブ・アプローチを対比させることに関する問題点をご指摘頂いた。「非合理」と言われている世界の内在的論理を、論理実証的に指し示すことの方が、説得力が高まるのではないかと、というご指摘である。これは、筆者にとっても納得のいく整理である。また「ゴミ屋敷」以外の「非合理」と社会的に排除される福祉的課題に関しても、その内在的論理や悪循環構造を論理実証的に解き明かし、その悪循環からの脱却の方法論を模索することは、「非合理」とラベルが貼られた人にも、またそれらの人々に関わる支援者にも役立つ研究であると筆者は感じる。ゆえに、今回の論考からは、「ナラティブ・アプローチ」の議論を外したことを追記しておく。

本研究は JSPS 科研費 26380789 の助成を受けたものです。

参考文献

フレイレ, P 2011 『新訳 被抑圧者の教育学』三砂ちづる訳, 亜紀書房

- 春日武彦 2001 『病んだ家族，散乱した室内』 医学書院
- 東豊 2013 『リフレーミングの秘訣』 日本評論社
- 勝部麗子 2009 「住民とまちづくりを支える専門職の役割」『地域福祉研究』(37)：7-23
- 木村敏 1973 『異常の構造』 講談社現代新書
- 木村敏 1975 『分裂病の現象学』 弘文堂
- 岸恵美子 2012 『ルボゴミ屋敷に棲む人々』 幻冬舎新書
- 久野研二・中西由紀子 2004 『リハビリテーション国際協力入門』 三輪書店
- 大熊一夫 2009 『精神病院を捨てたイタリア 捨てない日本』 岩波書店
- 関なおみ 2005 『時間の止まった家—「要介護」の現場から』 光文社新書
- Steketee, Gail; Frost, Randy, 2011, *Stuff: Compulsive Hoarding and the Meaning of Things*, Oxford University Press, (= 2012, ナショナル ジオグラフィック編集, 春日井晶子訳, 『ホーダー 捨てられない・片づけられない病』 日経ナショナルジオグラフィック社)
- シュミット, S 2005 『自由こそ治療だ—イタリア精神病院解体のレポート』 半田文穂訳, 社会評論社
- 杉野昭博 2007 『障害学』 東京大学出版会
- 竹端寛 2012 『枠組み外しの旅—「個性化」が変える福祉社会』 青灯社
- 竹端寛 2013 「『病気』から『生きる苦悩』へのパラダイムシフト：イタリア精神医療『革命の構造』」 山梨学院大学法学論集 70, 31-61
- 吉川悟・東豊 2001 『システムズアプローチによる家族療法のすすめ方』 ミネルヴァ書房